

18
Adult Only

丹下拳闘倶楽部
TANGE KENTOU CLUB



TRANS-AM 00

GANDAM-00 ONLY IMAGINATION BOOKs.

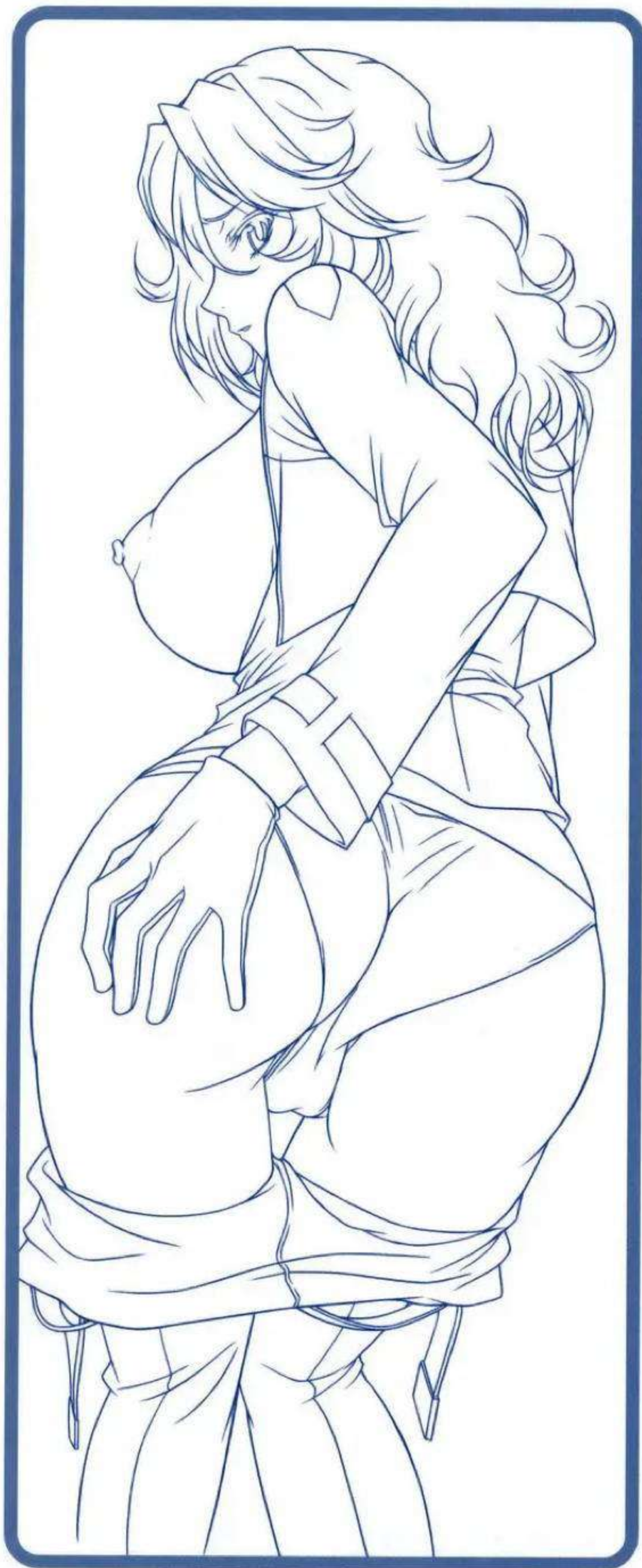
トランザム・ダブルオー

TANGE KENTOU CLUB

トランザム・ダブルオー

TRANS-AM00

GANDAM-00 ONLY IMAGINATION BOOKS.



■前書き

みなさまこんばんわ。
マリナよりもスメラギ！な
横田守です。

美少年がザックザクの
ダブルオーの世界において
「いいわ、お姉さまが
教えてア・ゲ・ル」的な
妖艶さがステキ。
胸とか腰のクビレが
たまりません。

いや、マリナも充分
好きなんですけどね。

男キャラは断然
ロックオンが
一押しです、ハイ。
渋い！カッコイイ！
自分もあんな大人に…
…ってもうそれはさすがに
無理ですか。

ところで
ガンダムマイスターって
「何故にワインの人？」って
言ったら
「それはソムリエです」って
言われてしまいました。

恥ずかしい（笑）

私…
どうかしてた

どうぞオ
開いているぜえ!

いや!

ダメツ!!

?…あの

さつきは
…!!

ああ。
先程はどうも。

フェルトさん…
だっけか?

見ないでっ

フェルト!!

彼を見て
取り乱すなんて…

ご覧の通り
取り込み中で
…ねっ!!

なんだあ？
出て行かないのかい？

俺は死んだ
兄貴じゃないんだぜ？

それとも俺の下で
組み敷かれてる女みたいな
事がしたいのか？

まあ…だが…

…いいぜ。
抱いてやるよ。

あっ

そっそんな
私は…ただ…

兄貴と似てるって
だけで俺は俺だ。

ああっ

啜えろよ

この女のマ○コに
挿さっている

このマン汁まみれの
チンポをな

そしたら
ご希望どおりに
してやるよ!

いやあ!
やっやめてえ!!

やだっ
いやっ!!

ははっ
本気かよ？

そっそんなに
広げないでエ

そんなに
したかったのかあ？

ほらっスメラギさん！
アンタもするんだよっ！！



はあんっ!

そーうだあ
いいぜえ

ああ

アッ

あひい

こ...こんな
カンジ?

ああ...
出る
出るッ!!

ひゃあ
ぶっ!!

なんだよ…もう
出来上がってる
じゃねえか

あっ……っ

やっ!!
そんな
いきなりっ

腰が勝手に
動いちゃう…!!

やだっ!
描き回しちゃ
ああっ!!

はあ
…んっ!

はひっく
あっああっ!!

ほらよっ！
お待ちかねの
モンだぜっ！

あっあっ
あっあっ
！！

あ…あ熱い！
アソコが熱い
のおっ！

ズツポリと
啜え込んでる
なあ！

はあツく
深いっ！！

やつ…はあ
激し…い

はあんツ！

自分だけ
感じてて
いいのかよ？

はあっ
あつくう！！

やめて
フェルトっ！！

あっあ

そうそう。
その調子だ！



こんな形でも
よかったの…

あつあつ
あああ！

はっ
はあつ！！

腔内に
出さぜつ！

大切だったの！
ロククオンの事が
好きだ…った…

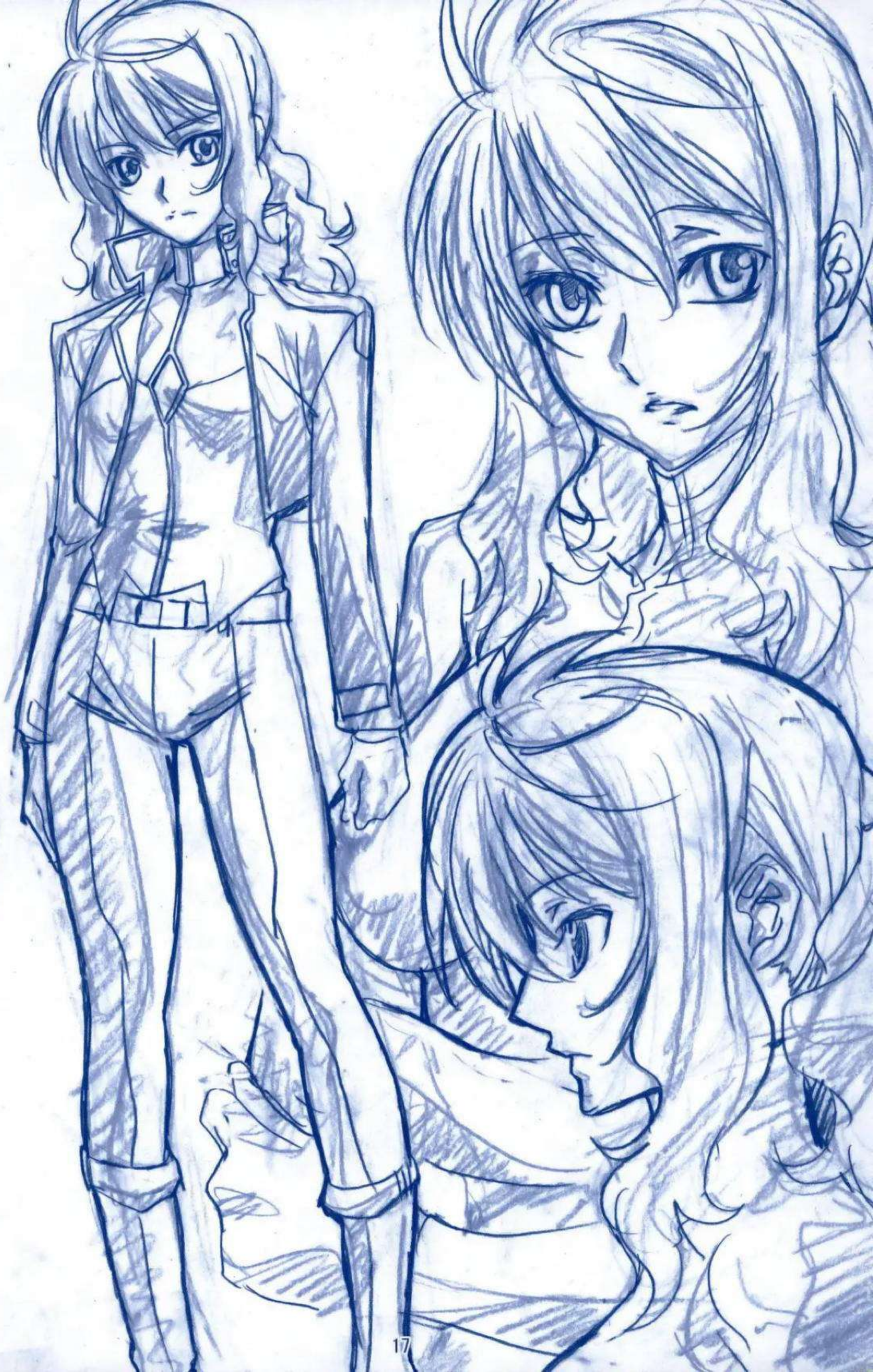
…ちくしやう

…私

ちくしやう











トランザム・ダブルオー

TRANS-AM00

GANDAM-00 ONLY IMAGINATION BOOKs.

ダブルフェイス

Double Face

作・美月ひな

「からん、とグラスの中の氷が鳴った。バーボンの中の氷は早く溶ける。」

「バーボンのアルコール度数が普通のウイスキーよりも高いからだ、遥か昔の開拓時代の魂が氷を溶かしているのではない、と試してみたりもする。」

「まったく意味のない感傷的な思考だ、と、わたしはスメラギ・李・ノリエガはそつとため息をついた。」

感傷的な思考。

「それは、戦術予報士にはまるでいらぬ感情である。余計な感情が入れば、大切なときに迷う。そして判断を狂わせる。」

「いっそ感情などはない方がいい。」

「だが、そう思いつつも、人一倍脆弱な「感情」が自分の中に流れているのは自分が一番よく知っている。」

グラスを持ち上げると、バーボンを喉の奥に流し込むように飲んだ。

喉が痛くなるような熱さとともに、バーボンが胃の中へと送りこまれた。

胃の中ががごと熱くなって、頭の芯が痺れるような酔いが回ってくる。

そして、酔っているときだけが、唯一の「罪を許された時間」だった。

大きく息をついてグラスを置く。と、ドアが開く音がして、誰かが入ってきた。

「アレルヤ君？」

「また飲んでるんですか？」
少々のがめるような視線で言われて肩をすくめる。

「わたしはこれがないと生きていけないのよ」

「少しひかえた方がいいですよ」
「いやよ。これはわたしの命なの」
「命？」

アレルヤ君の声が、かすかに冷笑的な響きをおびた。

冷笑的、というのはいかにも彼ににっかわしくないような気がした。

彼の方に目を向ける。
金色の瞳が、まるで観察するかのようになわたしの方を見つめていた。

金色の瞳？

知っているかぎり、彼は少し灰色がかった瞳

の持ち主だったはずだ。

「あなた……誰？」

「おや、酒びたりとはいえ、勘は悪くないんだな。さすがに戦術予報士様ってところか？」

アレルヤと似ている、とすら言い難い雰囲気を感じて、思わず立ち上がった。

「あなた、誰？」

「俺はハレルヤっていうんだ。よろしくな」

「ハレルヤ？ どういうこと？」

「アレルヤの奴はへたれだよ。だめな戦術予報士のせいで命が危なくなっても、文句ひとつ言えない。だから、俺がかわりに文句を言いにできたってわけさ」

「かわり？ ああ。貴方、多重人格なのね」

「なんとでもいいな。とにかく、あんたのくだらない作戦はまっぴらだ」

「そう。ごめんなさいね。だめな戦術予報士でそれは本当のことだ。彼らの命を危機にさらしたのには、本当に面目ないと思う。」

「もつとしっかりしたいのだけれど……」

「それだけか？」

「びしり、と言われて、少々かちん、とくる。」

アレルヤ君本人からならともかく、別人格にこゝも高圧的にでられるいわれはない。

「なによ。土下座して謝れとでもいうの？」

「おいしいな。もう少しだ」

言うなり、「ハレルヤ」が一步こちらに近づ

いた。

「女には女の詫び方ってのがあろう？」

言うが早い、強引に胸をわしづかみにされた。

「なにするのよっ！」

頬を叩こうとした右手を掴まれる。

「あんたの能力で、俺を殴れるわけないだろう？」

胸を掴んだまま、ハレルヤがあざ笑った。

「ひとを呼ぶわよ？」

「どうぞ。恥をかくのはあんたとアレルヤだ。」

俺には関係ないな

勝ち誇った顔でハレルヤが言う。たしかにその通り、この人格には傷ひとつつかないだろう。

「どうだい？ 俺の言うことをきく気になったかい？」

「どうしたらいいの？」

いまは、主導権は自分にはない。

むろん、ひとを呼んだ上に多重人格のことを告げる、という手段もあったのだが、そんなことをしてはアレルヤの心にどんな傷が残るかかわらなかつた。

「耐えよう、と決める。」

「お。いい顔になったな。俺に体で詫びる気になつたらいいな？」

「誰があなたなんか。満足したらアレルヤから出ていってくれるんでしょね？」

「それはあんた次第だな。どうする？　ここで
するか？　それともいい場所があるか？」

「わたしの部屋にしましょう。先にいくから。
10分後に来て」

言い捨てる、素早く自室に向かった。

自分の部屋なら鍵もかかるし、防音にもなっ
ているから、この事は漏れないだろう。

5分でシャワーを浴びよう、と決める。いく
らなんでもこのままベッドインはごめんだった。

部屋にもどると最短時間で服を脱ぐ。シャワ
ーをざっと浴びると、服を身につけた。

下着をつけるときに一瞬迷う。

煽情的な下着をつけたくはないし、かといって
あまりにも野暮ったい下着をつけるのもプライ
ドにさわる。

結局、白のレースの下着にした。

生地の部分もレースで、少々中が透けるものだ。
どうせしなくてはならないのなら、下着くらい
は気に入ったものをつけておこう、と判断した。

落ち着け、と自分に言い聞かせる。

ちよつとした火遊びなら、経験したことがな
いわけでもないし、たいしたことではない。

自分に言い聞かせてから服を着る。

10分ちようどたったときに、部屋のインタ
ーホンが鳴った。
ハレルヤは無遠慮に部屋の中を見まわした
あとに、わたしの方を向いていやな笑顔を浮か

べた。

「シャワーを浴びたのか。準備がいいな」

「汗くさい体でしたくないの」

「それはそれは。だが、俺はこのままで相手を
してもらうぜ」

「好きにすればいいじゃない」

「じゃあ、まず脱いでもらおうか。ゆっくりと
な」

「なんでそんな注文聞かないといけないのよ？」

「わかってねえなあ」

ハレルヤが苛立った声をだした。

「今日は、あんたが俺に詫びる会なんだぜ？
俺を満足させるためになんでもするのが当然だ
ろ？」

「……」

きりり、と唇を噛んだが、いまはどうにもな
らない。

ハレルヤはベッドに腰をかけると、にやにやと
笑いながらわたしが脱ぐのを待っていた。

ゆっくりと上着を脱いでいく。

シャワーを浴びたばかりの体はまだ暖かく、湯
気とはいかないまでも上気してかすかに赤く染
まっている。

「ほう。レースの下着か。サービスいいな。ち
よつと透けてるじゃないか」
肌にはつきりと視線を感じる。
ただ見られているだけなのに、物理的な圧力を

感じる気がした。

が。

その視線は、決して苦痛ではなかった。

むしろ、自虐的な喜びを与えてくる。

本当は、エミリオに詫びたかった。

わたしのミスで死んだ彼に。

ブラジャーをゆっくりと外す。

乳房が外の空気に触れるのと同時に、刺すよう

な視線を感じる。

ぞくり、と。

背中を走り抜けたのは、あきらかに悪寒では

なくて快感だった。

罰を望んでいる。

自分の中にひそんだもうひとりの自分が、こ

うされることを望んでいるのだ。

「あ……」

口の中がからからにかわいて、思わず口を開

いた。

体の奥から、蜜がしみ出してくるのが自分で

もわかった。

「おやおや。もう感じてるのか？」

「そんなことはないわ……」

口ではそう言ったものの、ハレルヤと目をあ

わせることができない。

「まあ、いい。こっちに来て、俺の口に乳首を

含ませるんだ」

「……」

言われるままにハレルヤに歩み寄る。

足が地面を踏んでいないかのように入らな

い。

ハレルヤの頭を抱き抱えるようにして、胸を

顔に押しつけた。

が、ハレルヤはなにもせず、ただ胸を押し

つけられただけだった。

「吸わないの？」

「吸ってください、とお願いしろよ」

「そなんこと……」

「こここまできて、できないって言うのか？」

かすかに怒気を含んだ声とともに、ハレルヤ

の左手がわたしの髪を掴んだ。

同時に強引に唇を奪われる。

口の中に舌が入ってくると、強引にわたしの

舌先をつかまえて、からみつく。

右手が、わたしの胸を掴むと、乱暴にもみほ

ぐした。

「んっ……」

痛い、という声を出そうにも、唇は完全に塞

がれていた。

ぐりっ、という感じで乳首を指でつままれる。

「んんっ！」

その瞬間、思わず体がうねった。

予想もしなかった快楽が体に走った。

「乱暴にされたいんだらう？」

ハレルヤがからかうように言う。

「お前は、罰を受けたがってるからな。俺が罰を与えてやるよ」

耳元に囁かれた。

「そんなこと……」

「ない、といいかける。が、いい終わるよりも前に、ハヤルヤの手が股間を触れた。」

「あっ！」

思わず声が出る。

「おいおい。こんなに濡らしておいて、いやもへったくれもないだろ？」

「濡れてる？」

「自分じゃわからないのか？」

下着の上から、指でばちん、と弾かれた。

「これも脱げ」

言われた通りに下着を脱ぐと、股間から糸のように蜜がこぼれているのが見えた。

本当に濡れている。しかも、自分で感じているよりもずっとたくさん濡れていた。

顔がかっ、と熱くなる。

こんな男に、罰を与えろと言われて、そしてその罰を求めて濡れるなんて。

「ちゃんとみせてみるよ」

言いながら、無遠慮に指を忍びこませてきた。指の関節が体の中に入ってくるのを感じて、思わず体をきゆうっと縮める。

「お。なかなかよく締まるじゃないか」

からかうように言われたが、もう、心の中に

はなんの余裕もない。

ただ、体が指を感じてるので精一杯だった。

「欲求不満だったのか」

「そんなこと……ないっ！」

「まあいい、とりあえず、今度は俺のをなめてもらおうか。丁寧にな」

ハレルヤが、挑発するような視線でズボンを脱ぎ、すっかりそりたった男根をわたしの目の前につき出してきた。

牡の匂いがした。

おそろおそろ舌を出す。

実際になめたことはまだない。

それがどんな味なのか、感触なのか見当もつかなかった。

舌の先に「それ」が触れる。

自分でも考えられないほど自然に、舌がその感触を受け入れた。

むせ返るような匂いがする。

が、その匂いはむしろわたしの鼻孔を気持ちよく刺激した。

「あ……」

思わず声が出た。

そして、同時にわたしの中の「牝」がゆっくりと目を覚ますのを感じた。

もっと舐めたい。

舌の先にこんな快感があるというなど、考えたこともなかった。

もつと。

死ぬ前に。

彼にもこうしてあげたかった。

贖罪とも後悔ともつかない気持ちだが、目の前にある快楽を倍加させているともいえた。

「あんた、舐めるの好きなのか？」

「え？」

上から降ってきた言葉にふと我にかえる。いつの間にか、夢中になって舐めていたらしい。

「ふふん。飢えてるんだな」

馬鹿にしたような視線を感じても、頭のどこかが痺れたようになっていて、腹が立たなかつた。

「俺の膝の上に座れ」

命令される通りにする。

体がぞくぞくと疼いていて、他のことが考えられなかった。

座ろうとした瞬間、ハレルヤの右手が見えた。

ちようどわたしが座ろうとしたあたりに置いて

ある。中指がこちらに向いて立っていた。

「これは？」

「この指の上にまたがれ」

指の感触を想像しただけで、体がきゅつ、と締まるような気分だった。

入れてみたい。

どきどきと胸が高鳴る。

するり、という感じで指が入ってきた。

体の奥まで刺さるような、快楽。

「あうっ……」

声を出すと、ハレルヤがわたしの唇をむさぼった。

舌が強引に進入してくる。

「んん……」

身をよじったが、それはハレルヤの指を体の奥へと導く役にしか立たなかつた。

さらに、ハレルヤの手が、右の乳首をぎゅつと掴んだ。

痛いくらい強い。

「痛……の……いいっ！」

呂律がまわっていない自分の声がした。

だが、もういまはどうでもいい。

自分からハレルヤの唇をむさぼる。

犯して欲しい。

心から思う。

気持ちいい。

お酒より。

そして、こうやって

男になぶられて、ただの牝でいるのが、心の中で望んでいることなのだ。

「いれ……たい」

「ふふん。淫乱なやつだな。そんなに俺のモノ

をぶちこんで欲しいか？」

「欲しい……欲しい……」

ハレルヤにしがみついて懇願する。

「じゃあ、四つんばいになって、こちらに尻を向けてお願いしろ」

「そんな……」

かすかに残った理性が抵抗した。

そんな恥ずかしいことをしてはいけない。正気にかえれ、と。

が、次の瞬間。

ぎゆうっ、と乳房を掴まれた。

「はああっ！」

最後のに残った理性が吹き飛んだ。

胸の先に火花が散るかのような快感が走る。

入れたい。もうそれしか考えられない。

わたしはお尻をハレルヤの方に向けるは、牝

犬が媚びるような視線を彼に向けた。

「入れて……ください……」

恥もなにもない。

ハレルヤが体の中に入ってきた。

わざとじらしているのか、ゆっくりと入ってくる。

「あうっ……」

じりじりとした快樂に我慢できずに、思わず

自分からお尻を突き出す。

「なんだ。我慢できないのか？」

からかうような言葉に、首を縦に振る。

「できない……早くうっ……」

「ごりっ、と。」

体の中をこすられた。

ハレルヤの男根が、奥までわたしを貫いている。入った……てる……う」

「ごり。」

「ごりっ。」

体の中をこすられる音を肌で聞いた。

「気持ち……いい……」

どうしてこんな快樂を忘れていたのだろう。

むしろそれが不思議だった。

わたしは夢中で腰を振って。

そして叫んでいた。

なにを叫んでいるのかは聞こえない。

胸の先も、なにもかも、髪の毛の先まで。

全身が痺れていく。

「あうっ……」

意味不明の言葉が聞こえる。

わたしの声で。

「気持ちいいですう……」

体の中で、さらに大きな快樂の塊が膨れあがる。

「あ、いく……いくわっ！」

きゆうっ、と。

自分の体が男根を締めつけた。

同時に、自分の中に熱い液体が吹き出してきた。

それが精液である、ということを知った。

それが教えてくれた。

「だが、いま感じるのは、その熱さだけだ。いいっ！」

中に出されている。

それがすごく嬉しかった。

こうやって牝でいたい。

「ふふ。楽しかったぜ」

ハレルヤの声がした。

「アレルヤもよろしくな」

意味のわからない言葉が聞こえた。

次の瞬間。

「スメラギさん？」

アレルヤの声がした。わたしのよく知っている、少し気弱な少年の声。

「え？」「これは……？」

アレルヤの驚愕するような声。

どうやら、ハレルヤだったときのことは覚えていないいらしかった。

「スメラギさん？」

悲鳴のような声がした。

そして、その声を聞きながら、わたしはふっ

と思った。

アレルヤは、どんな風にわたしを抱いてくれる

のだろうか？

わたしは、牝の視線でアレルヤを見た。

「ねえ、アレルヤ」

ゆっくりと、蠱惑的に、しゃべる。

「わたしを抱いて？」

そしてわたしは失われた快楽を思い出す。酒にかわる新しい快楽を！

E N D



トランザム・ダブルオー

TRANS-AM00

GANDAM-00 ONLY IMAGINATION BOOKs.

マリナ・イスマイル
皇女殿下

懐かしいでしょう？
そのお召し物は

我々の方で
用意させて頂きましたよ
そしてこの首輪も…ね！

あつ……

遠慮なさらずとも
ここでなされば
よいでしょう？

トイレ……に
行かせて……下さい

貴女がソレストル・
ビーイングの連中と
行動していたのは明白

我々の問いに
答えて下さい
ませんかねえ？

そのお口が
強情だからですよ
・・・フフツ

ふぐう！
ひやめつ

ひやめつ！

もはや貴女の
身体に聞くしか
ありませんねえ

話さないクチは
こうするしか
ないでしょう？

如何です？
口内を犯される
御気分は？

ふぐう！！

おぶっ
おオえ!

はぶっ
ぶっ

ぶはっ!

ひいやああ!!

オラッ!ノドの奥で
締めるんだよっ!!

胃液が溢れて
口の中が
あったかいぜえ!!

皇女殿下でも
所詮は只の牝
ですなあ

上の口で答ええないのなら
穴という穴すべてに
問うしかないでしょう？

二十四にもなつて
前穴も処女とは
大したものですなあ

お漏らし姫の
穴には栓をしないとな！

さあて！！

いっイタッ！
痛あひ！
いやっいやあつ！！

お尻があつ
あ…熱いっ！！

うっぐ
動かな…いでえ
いやっいやああ！

じきに
感じるように
なるさ！

ひっぐう
こんなっンツ…

こんなの
いやあ！
あっぐう！！

これは政治交渉にも
使えるカラダだなあ

ふっふっふっ！
ふっふっふっ！
ふっふっふっ！

ホラアもつと
舌を使えっ！

ひぎゅっ！！

さあっ！
飲めっ！！

ひやぶっ
ぶぶぶぶぶぶ！！

ん？喋る気になつた
かな？
ハハっ…だが口が
塞がっているは無理だな

亡国の姫君の初体験が
これとは実に数奇な
もんだなあ！

タマもしゃぶれっ！
丁寧にだぞっ！

どうだ？
深く挿っているだろう
子宮に当たるぞ！

そらそらっ
出たり入ったり
丸見えだぜ？

あっあぐう
はひひひひ

ハハハっ！
自分の乳首も
しゃぶれる女だ！！

ひやぶっ！
ひやめえっ

尻穴に精液を
注いでやるぞおっ！

ひっ！
ひいあっああ！！

あ、熱い！
熱い！！

尻も
感じるのか

前にもナカ出し
するぞっ！

いやっ！
やだっ！
やめてえええ！！

はあっ！

あついやあ！
あああつ！！

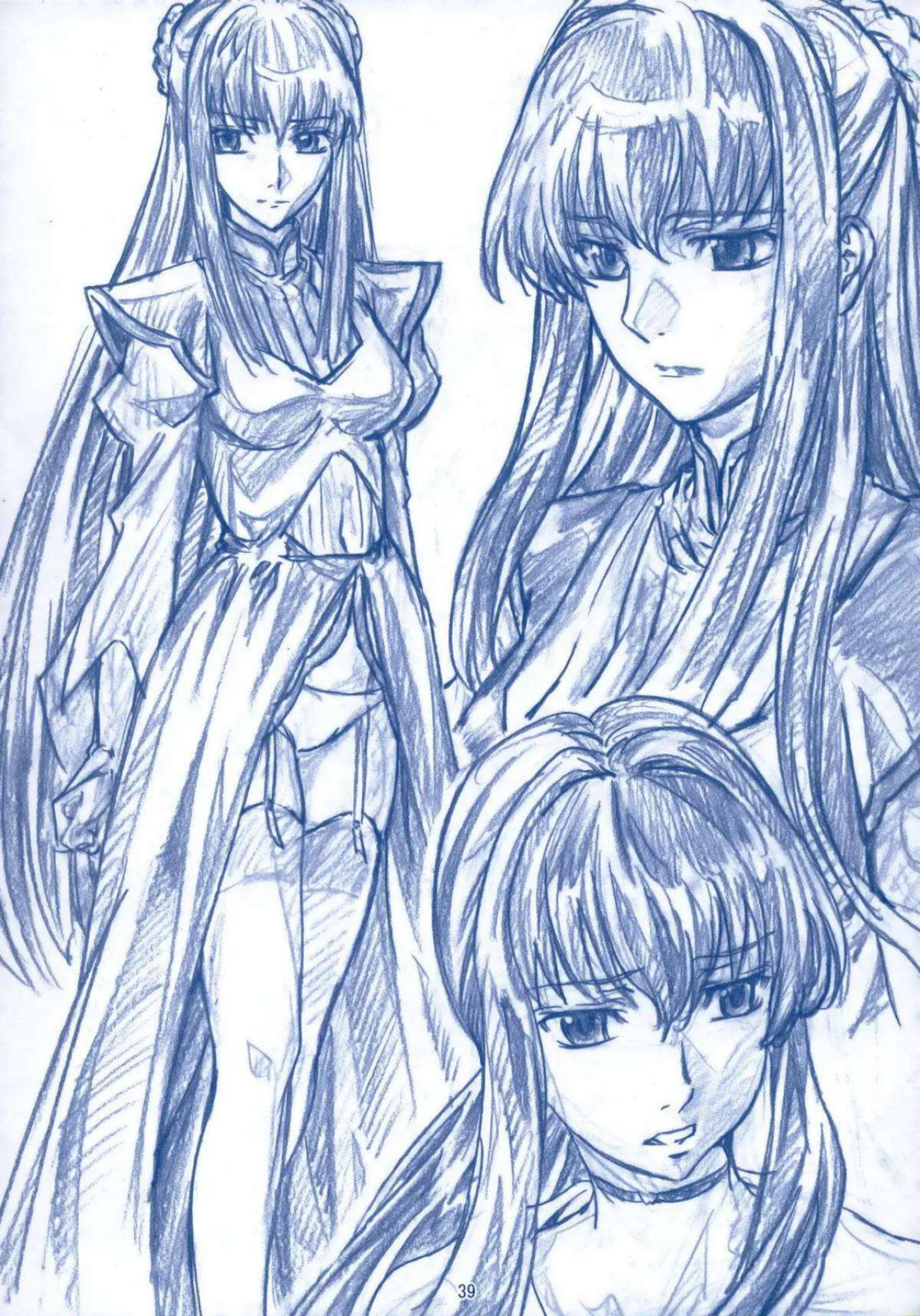
そオらっ！
受け取れっ！！

ククツ…一体
誰の子を
孕むのやら

この姿では
アザディスタンの国民も
失望するであろうなあ

実に良い手駒が
手に入った

我々…アロウズに
とって…な









GN-0000/15
SEVEN SWORD
-00-



さあてと

今回はさ

ひゃひゃぶ

いつもは個別に

してたけどさ

スメラギさんも

予測してた？

そろそろかなっ

てさ

一度に俺たち

〇〇〇〇マイスター

4人の相手して

もらおうかつ！

はあっ 乳首は
らめえ・・・感じ
ちゃううう

まったく・・・
鏡で見せてやりたいよっ

いやらしい
顔でしゃぶるなあ

でかい乳のくせに
感度良いんだよなあ

ホント。

もしかして軽く
イっちゃってない？
今度は尻穴と三穴かな

指じゃ物足りない
みたいだな。そろそろ
突っ込んでやれ

はあ
んあつ

あつ

奥まで入ってる
いっぱいよお

なんなく
呑み込むなあ

ああ・・・でも、
は、激しくてえ

ホラホラ
自分ばかり
感じてちゃさあ
だめでしょ？

あつああつ!!

あつあいの!!
気持ちいいの

あつ熱いのが
中に!!

あつあつあつあつ!!

おい!! 刹那!!
中に出すなよ
まだ順番残って
んだろっ!!

ほらっ!!
休んでない
次!!

機密保持を
タテマエに4人を
独占してるのよねえ

私はフェルトの
肉ドレイだけどね!

寝かせてえ

END









LEO





「宇宙はいいわ
 肩がこらないもの。」
 「酒のまわりも
 肩がこらないもの。」

2007.12
 Akiyama

□あとかき

という事で
ダブルオー本
いかがでしたでしょうか？

ダブルオーは男女間の
恋愛模様に移り変わり
というより、
あらかじめ恋人が
ほぼわかっている展開
だったりなので、

ロックオンが髪を切っている
場面とかでロックオン×刹那と
いったような
カップリングの妙を楽しむ
といった見方も
なるほどなあ〜と
いった感じで
勉強になりました。

他にはクリスティナさんの
御奉仕なんてストーリーとか、
紅龍×玉留美とか
書けたら良かったかも
ですね。

平和の為の武力という
そもそも矛盾があるなら、
食べてるのに痩せるって
矛盾があれば大歓迎！
とか思うのでした。

ご意見ご感想
叱咤激励などありましたら
宜しくお願ひします。
それではまた会える日まで
ごきげんよう〜。



TANGE KENTOU CLUB



トランザム・ダブルオー

TRANS-AM00

GANDAM-00 ONLY IMAGINATION BOOKs.

丹下拳闘倶楽部 HP

<http://park19.wakwak.com/~myf/yokota/tange/tange.html>

横田守 HP

<http://park19.wakwak.com/~myf/yokota/>

土代昭治 HP

<http://park19.wakwak.com/~myf/dodai/index.html>

発行：丹下拳闘倶楽部

※本書の一部、または全内容を無断で使用／転載する行為を禁じます。
ネットへのアップロード／不特定多数への配布行為も同様にも禁じます。



TRANS-AM 00

TANBE KENTOU CLUB